

オランダ国内では15人のメンバーが演奏するのが普通だったが、海外遠征では旅費の節約のため8人に絞ったという。

「メンバーが減っても雰囲気は変わりませんよ。サポーターを元気づけるという目的はしっかり果たしていますから」

現在テレトーズは、オランダ国内はもちろん、海外でも演奏活動を行っている。「土曜日にはいろいろな所で演奏するんです。ホテルや教会の時もあれば、屋外の時もある。企業の集会と呼ばれることもあります。ここ10年間は、ドイツツアーもかかさずやっていた、時には3000人のお客さんの前で演奏する

ですと、ヴァードンクは誇らしげに語ってくれた。オランダ国内でも年に1度は大きなコンサートを開いているという。

### オランダ代表サポーターの雰囲気はクラブと違って喧嘩とは無縁の世界

群集の中でオランダ人を見つけるのは、そう難しい。なぜなら彼らはいとも大群で行動し、揃いも揃ってオレンジ色を着ているからだ。愛国心の強いオランダ人にとってオレンジは特別な色であり、それはサッカーの試合と女王の誕生日に顕著に表れる。オレンジ色そのものは、上品な色ではないかもしれ

ないが、色の評価はあまり重要ではない。オランダ人にとってそれはオランダ人に訴えかけるのである。王位継承者のアレクサンダー王子も、祝いの席にはご愛嬌でオレンジ色のネクタイを穿くほどだ。

オランダ人は大勢集まって騒ぐのが好きで、ビールは必須アイテム、大声で歌うのは必然の結果である。一般的なオランダ人は、プロテスタント、あるいはカレン派として教育を受け、そこから育まれた社会的、宗教的、文化的価値観に誇りを持っている。根は寛容で、のんびりしていると思われる。

オランダ人サポーターは、大きく2つの

演奏することで、スタジアムの雰囲気は良くなって相手をチームが勢いづくこともあるかもしれませんがね！日本チームが私たちの演奏を気に入ってくれたら、それはそれで嬉しいことですけれど、そのためには、誰もが知っている曲を演奏できるようにならないといけないですね。歌わなくても手拍子をするだけでも良いんです。なるべく多くの人たちと一緒にお祭り気分を共有することが、私たちの願いですから」

音楽でお祭り気分を楽しむのも良いが、やはりサッカーを楽しむのもある。サポーターが見たいのはもちろんオランダ流のサッ

カー、そして自国の勝利である。オランダはそのスタイルを貫きながら、勝利を掴まなくてはならない。どちらが欠けてもだめなのだ。オランダのサッカーファンはサッカーを知り尽くしており、試合が終わることに監督の元には厳しい批評や意見が轟く。ポルトガルでのユーロ2004の最中、当時のデック・アドフォカート監督に業を煮やしたサポーターたちは、お金を募り、帰国用の飛行機のチケットを監督に突きつけた。そしてそのチケットの行き先は、オランダではなくベルギーのアブリュセルだったと言う。つまり監督辞任を要求するだけでなく、国から出て行けという厳しい意思

を表したのである。

代表チームに対する期待は究極に高く、その点でデンマークやスコットランドのサポーターとはずいぶん違っている。ヴァードンクも監督に対する不満を隠そうとはしない。

「ファン・バステンに対する要求はさらに高くなるでしょうね。プラスバンドを排除することで何を成し遂げてくれるのか。電子音楽で本場に選手たちがサッカーに集中できるのか、見てみたいのですよ」

W杯を観戦しに行くのは、一般人にとって必ずしもたやすいことではない。入場券



FootBa LIFE

ループに分けられる。アヤックス、ユトレヒト、フェイエノールトといった1部リーグのビッグチームのファンは暴力的になりがちで、試合の日は相手チームのサポーターのリーダーを呼び出してボクシングの試合をするのだそうだ。対して、代表チームが勝てば良いという考えの「ブルジョア派」は、より温厚である。それでオランダが海外で試合をするとなれば、オランダ警察は必ず数人の警察官を派遣し、サポーターの素行を監視することになっているが、オランダ人サポーターは、デンマークやスコットランドのサポーター同様、素行が良い方だと言えよう。広場に集まってしまうのが、スタジアムにしようが、一日中オレンジ色を身にまといながら飲んだり歌ったり、時には道行く人を呼び止めて和気

あいあいとしたムードが漂う。しかしそれは試合が始まるまでの話で、スーツを着たビジネスマンも試合とするとスーツを脱ぎ捨て、オレンジを着る。女性サポーターも多い。テレトーズはそうした良いサポーターの象徴的存在なのだ。「1988年に活動を始めて以来、一度もケンカや暴力に巻き込まれたことはありません」と、ヴァードンクは言う。

「代表チームのサポーターの雰囲気は、クラブチームのとは違いますからね。かつてフェイエノールトのプレジデントだったファン・ブラーグは、よく私たちと一緒にスタジアムで演奏をしたものです。あと思い出深いのは、招かれてイギリスに行った時のことです。イングランドのサポーターが熱くなりやすいのは有名ですから、実は少々恐れていたんです

が、演奏を始めてみると、彼らみんなが一様に歌ってくれたんです。翌日の新聞には「歌う人々に争いの心なし」なんて見出しが出たんですよ。かの有名な「ニューヴェーヴァーウォークアロン」を演奏して、サポーターが大合唱したことは、一生忘れられない思い出です」

これら先、テレトーズがオレンジの試合で演奏することはあっても、国内リーグ戦で彼らの姿を見ることはないだろう。「スタジアムの雰囲気はずいぶん変わってしまいましたとヴァードンクは残念そうに話す。

「今はフリーガンや不良な若者たちが幅をきかせていて、本当にやけさき事態です。最後に国内のリーグ戦で演奏した時は、自分たちの身の危険を感じたほどです。でも代表の試合だと雰囲気は全然違ってきます。私たちは



FootBa LIFE

の他にも交通費や宿泊費がかかることを考えると、泣く泣く諦める人も少なくないだろう。そういう意味で、低収入のフリーガンたちははたいて国内で大金にせざるを得ないのだが、今年は開催地が隣国ドイツである。EU統合されて以来、EU圏内の移動が国内と同じくらい容易くなったので、オランダ人のトラブレンメーカーたちがドイツに入国する確率は高い。それで今回は、両国警察が協力して国境の警備にあたることが決まっている。これは、ドイツ人とオランダ人の間に根深い敵対心が存在していることを考えると当然の措置だといえる。バイエルンに所属するオランダ人ストライカー、ロイ・マカーイも、チームメイトからオランダをバカにするようなジョークを言われると不満をこ

ぼしており、そうした小競り合いは常に存在する。オランダ人はドイツ人のことを侮蔑だと思っており、時には過去の戦争のことを引き合いに出してドイツ人を非難する。サッカーでは、74年のW杯でクライフ率いるオランダが、ベッケンバウアー率いる西ドイツに負けた事実を、どうしても飲み込めないというオランダ人サポーターは多い。両国のサッカー協会は、双方が熱くなりすぎるのを防ぐべく、親善試合を増やすなどの対策を練っているが、今はただW杯が何事もなく平和的に行われることを祈るしかない。

オランダには、ヨーロッパ系以外の移民が多く、かつてオランダの植民地だったスリナムなどからは多くの優秀な選手が出ている。現在ではモロッコやトルコ系の選手も珍しく

ない。しかし、オランダ代表チームのサポーターに目を向けてみると、ほとんどが白人で、移民層の多くはオランダではなく、国内のクラブチームを応援しているようだ。その理由を考えると、オランダでマイノリティ出身の選手が必ずしもうまく適応できていない事実が浮かび上がってくる。スリナムやその他の元植民地出身の選手たちと、白人選手の間には見えない壁のようなものが存在するのだ。

これはオランダが乗り越えなければならない大きな課題であろう。オランダには確実にマイノリティ出身の選手が増えているのにもかかわらず、それを受け入れているのはオランダ社会のほんの一部にすぎないのだから。